

富士のさと人通信

発行所

(独)国立青少年教育振興機構
国立中央青少年交流の家
電話：0550-89-2020
メール：fujinosato@niye.go.jp

「オープンハウス2025」を開催



御殿場市で推進する「木育」の要素を取り入れた薪割体験をする様子

交流の家は、十一月一日（土）に「オープンハウス2025」を持続可能な未来を地域の方々とともに「を」を開催した。この事業は、『SDGs』をテーマに様々な体験の提供を通して、体験活動の重要性の普及と当所の周知を図り、地元

団体の取組情報の発信と交流の機会となり、関係団体とのパートナーシップを推進し、地域とともにある施設を体現することを目的としている。当日は当所を含め陸上自衛隊など二一の団体や高等学校が出席し、約一六〇〇名の来場者を楽しませた。

当所は「木育」をテーマとしたブースを設置し、来場者に「火起こし体験」や「薪割り」の体験などを提供した。子供たちは薪割りや火起こしに何度も挑戦し、楽しむ姿が印象的であった。各高等学校のブースでは、日頃の探究活動の成果を発表する場として多くの高校生が来場者たちに様々な体験や商品を提供し、来場者を感じさせていた。また、今年度はお菓子すくいや茶道、

華道の無料体験券を景品としたスタンプラリーを新たに実施した。多くの子供たちがスタンプ探しに所内を奔走していた。

今回のイベントがきっかけとなり、多くの人が体験活動の重要性や楽しさを知り、当所のファンになることを期待している。



御殿場高校出展の体験ブース

高校・大学生ボランティアの企画「パワー全開☆なぞときっずキャンペーン」を実施



謎解きをする参加者

交流の家は、十一月二二日（土）～二三日（日）に「パワー全開☆なぞときっずキャンペーン」を開催した。小学一～三年生、一〇四名の申込みがあり、抽選で選ばれた二三名が参加した。この事業は国立中央青少年教育振興機構が実施しているボランティア養成研修を受け、ボランティア登録をした大学生が中心となり、企画から運営までを担った。子供たちは、「探偵」になりきり探偵学校

という本格的なストーリーに没入して二日間の「修業」を体験した。プログラムを通じ、「犯人が何を持ち去ったのか」という最終ミッションをクリアするために必要な、思考力、観察力、そして仲間と協力する協調性などの「非認知能力」の向上に資する体験を行った。ほかに朝食として「ホットサンド」を作った。自分で作ったホットサンドを食べる子供たちは笑顔いっぱいだった。また、「親元を離れ、宿泊し、二日間仲間と過ごす」という大きな挑戦が、子供たちの自立心を大きく育む機会となった。保護者からは「子供にとっても親にとっても成長するきっかけとなった」「入浴、トイレ、布団の片付けも一人ででき、自信が付いたようだ」などのポジティブな声が多く寄せられ、満足度一〇〇%の評価を得ることができた。今後は、本事業の実施結果を振り返り、ボランティアの成長ならびに事業の発展に繋げていく。

※裏面にづくし

「もしも災害が起こったら」を疑似体験する「富士のさと防災・減災教育キャンプ」を実施



陸上自衛隊の炊き出し体験

交流の家は、十二月六日（土）～七日（日）の二日間、「富士のさと防災・減災教育キャンプ」を実施した。本事業は、不自由な環境下において自ら考え、工夫しながら生活する体験を通して、防災・減災を自分事として捉えて、考える力を育むことを目的としており、静岡県内の小学四～六年生二二名（応募三〇名、抽選）が参加した。

初日は、陸上自衛隊滝ヶ原

駐屯地の協力のもと、災害時に「水」や「電気」といったライフラインが使えなくなった時を考え、事前にどう備えるか、少ない資源をどう使うかを考えた。また、避難所で使用するダンボールベッドの作製を行い、できるだけ快適な生活環境になるよう考えた。

続く「もしもタイム」では、夕方以降に水と電気が使用できなくなる状況を設定し、参加者は事前に準備した寝床や道具を活用し生活した。暗闇の中で不安を感じつつも、役割分担をしながら水を分け合ったり、声を掛け合って行動したりする姿が見られ、厳しい環境の中で共助の意識が育まれていった。

二日目には、能美防災株式会社提供のカードゲームを用いた防災に関する振り返り活動や、陸上自衛隊による炊き出し体験、日本DMC株式会社の協力によるドローン操縦体験を行い、災害時における公助の役割についても学んだ。参加者からは、「普段の生活とは異なる不自由さの大変さを感じると同時に、その中で

の楽しさもあった」「日常生活のありがたさを改めて実感することができた」といった感想が寄せられた。



暗闇の中で夕食を食べる様子

宇宙×ドローン×AIで未来を描く「富士のさとプログラミングキャンプ」開催

交流の家は、二月十四日（土）～十五日（日）に、「富士のさとプログラミングキャンプ」とエアロスペースジュニアアカデミーを開催し、抽選で小学生十八名が参加した。本事業は、前千葉大学環境研究センター准教授で、現在は一般社団法人先端空間情報技術評

価支援センター理事長を務める本多嘉明氏をプログラマアドバイザーに迎え、宇宙、プログラミング、AI等の先端的題材と自然体験を組み合わせた創造的・探究的に学ぶことを目的として実施した。

宇宙の広がりや地球の歴史を学ぶ講義を皮切りに、空間測定活動やドローンプログラミング、星空観察、AIを活用した未来のまちづくり等を体験的に学んだ。子供たちはグループで試行錯誤を重ねながら課題に取り組み、最終日にはキャンプでの学びや今後の展望について発表を行った。参加者からは「プログラミングが身近で面白いものだと感じた」「仲間と話し合いながら考える楽しさを知った」「交流の家で見る星空がとてもきれいだ」といった声が聞かれ、探究的な学びへの意欲の高まりがうかがえた。

本事業を通して、子供たちはプログラミングの面白さや可能性を体験するとともに、協働的に課題を解決する力を育む場となった。

AIで未来都市を生成



「交流の家の統計」
令和6年度新規利用団体数
令和6年度に初めて当所を利用した団体
179団体
(全団体数 1,537 団体の内)

【PR】

公式「Instagram」で日々の情報を発信しています。ぜひフォローしてください！

